

カイ・グリの目は赤い／夢見る男たち／また待たれる身のつ
らさについて／イノセント・バイスタンダーたちの世界／パズル

赤い鯨のいる海

エッセイ・オン・ミステリ
各務三郎

現代推理小説入門

ン／星新一セント・バイスターンイノセント・バード探偵比較表
ン／星新一兄る男カイ・グリの目は赤い／夢見る犯罪小説
ン／星新一バイスターンについて／イノセント・バード星新一ま
ン／星新一ウトに寄せる脚註／ネロ・ウルフは名料理長／西
ン／星新一性／キング・コング復活／冷戦のマスター・イ・
ン／星新一星新一の宇宙



読売新聞社

赤い鯨のいる海 一九七七年一月二五日 第一刷 定価九八〇円

著者／各務三郎 ©Saburo KAGAMI 1977 装幀／池田拓 カバー折返し写真／吉川努

編集人／笠井晴信 発行人／二宮信親

発行所／読売新聞社

〒一〇〇東京都千代田区大手町一七一一

〒五三〇大阪府北区野崎町七七 〒八〇二北九州市小倉北区明和町一一一一

印刷所／図書印刷株式会社 製本所／ナシヨナル製本 0095-702200-8715 〈落丁・乱丁本はおとりかえします〉

赤い鯨レッド・ヘリンの
いる海

思いがけない風景にぶつかって呆然となることがある。

数カ月前、ひさしぶりにRCグライダー専門店をのぞいてみようと、神楽坂をのぼって筑土八幡のほうにくだっていった。

ふと目をあげると前方に駅が見える。見たこともない駅である。そのあたりにある駅は地下鉄の神楽坂駅しかないはず。都電が走っていたころからよく知っている土地なのに、あんな風変りな駅を見るのははじめてである。

若い男女の学生たちが大勢駅前にたむろして笑っている。通行人たちも平気な顔で駅方向に歩いている……一瞬、わたしは気味悪くなった。

『レベル3』の主人公のように、時空を越えた世界の入口をのぞきこんでいるような気持。しかし、フィニーほど懐旧病にとりつかれていないわたしは、古めかしいスタイルの駅を見ても、とんだ場所に迷い出でしまったくらいにしか感じなかった。ガスタンクを見ると、なんともいえぬ恐怖感と嘔吐感に襲われる友人がいるのだが、わたしはいたって健康そのものの精神の主で、地上に盛りあがった木の根っこを見ても、気持などゆさぶられることはない。

旧東京の世界へすべりおちてしまった！ とあわてたが、それでもおそるおそる駅に近づいていった。

道ばたの店の看板が目に入った。「山田紙店」……いつも原稿用紙を買っている文房具屋である——なあんだ、国電の飯田橋駅じゃないか！

とたんに頭のなかの景色が猛烈なスピードで逆方向に動きだし、いつもの見慣れた景色が脳細胞に嵌まりこんだ。

飯田橋駅からR Cグライダー専門店のスルガ屋まではせいぜい一キロ。そのあいだに何が起ったのか？ 首をかしげたとたんに笑いだしてしまった。

左側の歩道を歩いていたわたしは、途中で空腹感をおぼえ、目についた道むこうの蕎麦屋にとびこんだ。蕎麦を待つあいだ、近着の“Radio Control Models & Electronics”をめくってグライダー関係記事を眺めていたのだ。蕎麦を食べおえると、スルガ屋にむかうつもりでそくさと左に歩きだした……これではもと来た道へ逆もどりだ。

それでもわたしはおかしいとは思わない。脳細胞は眼前の風景を正しい方向に組み立ててしまっていたのだから……。つまり蕎麦屋で読みふけた雑誌が、正しい方向を迷わすへ赤い鰯レッド・ヘリンとなったのである。

赤い鰯レッド・ヘリンとは燻製の鰯トシム。狩猟のことはまるで見当がつかないが、手近かの英和辞書をひくと

「人の注意を他にそらす物…猟犬にきつねと他の物の臭いをかぎ分けさせる訓練に燻製鰾を用いることから」などと出てくる。

アル中であった奇術師兼推理作家の故クレイトン・ロースンは、観客の目をごまかす演技一般を指す奇術用語「ミスディレクション」を作品に援用している。裁判官が陪審に対して被告の罪の有無について先入観を与える説示をすることもミスディレクションという。

狩猟のさかんな国イギリスの推理作家協会の機関誌が「赤い鰾」というのもうなずける話である。

しかし、手がかりといいニセの手がかりといい、下手に使われるとがっかりする。名作といわれるクリスティーの『アクロイド殺人事件』では、読者は「赤い鰾」の臭いしかかがされていない。キツネの臭いなどまるで教えられていないのだ。謎解きにいたって探偵が得々と、「手がかりはちゃんとあったよ」と報告する。あわててページをめくり直すと、一行にも足らない手がかかりしき箇所を発見させられて、啞然とするハメにおちいる。これでは、器具なしで一万分の一の血液水溶液を検査しろというに等しい。

パズル・ストーリーは、謎や犯人を探しだすことに重点がおかれたミステリである。そのために、犯人当ての知的遊戯視されてきた。だが、それは半世紀も昔の通念にすぎない。そのことを読者や作家は忘れてしまっている。

第二次大戦後の英米のミステリ界は、パズル・ストーリーから脱皮することで成長してきた。単なる謎解き小説では、小説好きの読者をひきとどめておけなかったためである。アメリカ探偵作家クラブ賞やイギリス推理作家協会賞の受賞作のほとんどは、サスペンス小説、犯罪小説、スパイ小説、スリラー小説、冒険小説などに与えられてきた。

一九三九年、ヴァン・ダインが死んだときには、すでに彼の作品は読者に背をむけられていた。一九三〇年代の作品で現代読者をひきつけているカーの場合は、オカルト・ムードがあるからだろう。やがてオカルト流行も消えて、カーの作品は一時期同様読まれなくなるだろうが、彼の創り出した「有り得べからざる世界」の楽しさは、いずれ息を吹きかえすはずである。その世界こそパズル・ストーリーを成立させている必要条件なのだから。

『誰かがヨーロッパの名料理長たちを殺そうとしている』という楽しいミステリがある。夫婦で書いた作品で、名料理長たちが、パン焼き竈で焼き殺されたり、ミキサーにしかけられたプラスチック爆薬で殺されかけたりする趣向。犯人の動機がユニークだった。女料理人が男の料理人からソースに加えるスパイスをききだそうとしてベニスをくわえながらいろいろカマをかける場面などあって笑わされたが、おもしろいのは、作者が手がかりや「赤い鯨」をほとんど無視する態度で書いていることである。

それらがなくても読める小説でなければ現代には通用しなくなっている。言葉を変えて

いえば、『誰かが……』の場合、それらがストーリーにとけこんでいるミステリとでもいおうか。(もつとも三分の二あたりで犯人の素性がわかるしくみになっているが)

五、六年前、大きな本屋の支店長と話したとき、「いまの若い読者は、何頁で犯人がわかったよ、などといいませんね。ムードを楽しんでいるようです」ときかされた。「十年ごとに購買層が変わりますよ」とも話してくれた。

銀座の東芝商事が従業員の読書調査をおこなったところ、「よく読む小説」ベスト1に推理小説があがったという。六一%という比率だそうだが、それよりも「どこで読む」の質問項目に、七三%が通勤電車で、と答えているのにひかれた。机にむかって読む比率が三%というのもおもしろい。

こうしたサラリーマン読書法に、数語の手がかりや下手なへ赤い鯨など無視されるのが当然だろう。冒険小説が売れている理由も納得できる。

冒険小説の物語重視の精神は、ミステリに欠かせないところだろう。つまらない謎を小出しに出して読者をいらだたせるだけのパズル・ストーリー特有の手法は、いずれ消えてゆく運命にある。みごとな舞台設定、魅力的な犯人のしかける鮮かな謎、名探偵、巧みなストーリーテリング。これさえそろっていればパズル・ストーリーがミステリから消えることはなからう。

よごれた海には魚は住めない。早く赤い鯨が回遊してくる海を見たいものである。

赤い鯨のいる海／目次

入門篇／カイツブリの目はなぜ赤い

夢見る男たち、あるいは待たれる身のつらさについて 15

イノセント・バイスタンダーたちの世界 20

カイツブリの目は赤い 28

パズル・ストーリーとエラリー・クイーン 34

ロマンチック・サスペンス入門 52

童謡殺人 64

アイ・スパイ！ 73

ジュリアン・シモンズの犯罪小説論 79

ハードボイルド探偵比較表 89

冒険小説を読むときは…… 103

英国女流ミステリ作家メモ 108

応用篇／ボンドから星新一まで

ジェームズ・ボンド 117 戦争の犬たち 118

リンガラ・コード	120	階段	122	スカイジャック	124
追跡	126	ディリンジャー	128	KG B	130
マラソン・マン	132	暗号戦	133	黄金伝説	135
マラガからの秘密指令	137	オニオン・フィールド	139		
ケープタウン	141	鼠	143	唾棄すべき男	145
大列車強盗	147	ルウインタ―の亡命	149		
原生林の追撃	151	コロッサス	154		
夢の底から来た男	156	夫と妻に捧げる犯罪	158		
ペインティング・ナイフの群像	159				
シンデレラ・リバティ―	161	野蛮人との生活	163		
ここにて死す	165	灯らない窓	167		
東京のロビンソン・クルーソー	169	冷凍人間	171		
剣客商売(天魔)	173	鏡よ、鏡	175		
吸血鬼は夜恋をする	177	マリオンの壁	179		
KKKランスマン	180	剣に生き、剣に斃れ	182		
ティンカー・ティラー	184	ソルジャー・スパイ			

死んだ耳の男 186 アルキメデスは手を汚さない 188

夜のかくれんぼ 190

専門篇／料理のへたな作家は信用できない？

ネロ・ウルフは名料理長 195

故スタウトに寄せる脚註 217

私立探偵業 226

冷戦のマスターズパイ・ゲーレン 233

キング・コング復活 243

星新一の宇宙 249

ユーモア・スケッチと小林信彦 256

西村寿行の感性 265

入門篇／カイツブリの目はなぜ赤い

